住まいを「小さく」したら、人生の選択肢が広がって。

家やモノ、そして人。慣れ親しんだ暮らしを改めて見直してみると、これまでにない新しい可能性が見えてきました。

撮影・黒澤義教　文・坂本 愛

低価格で移動も可能なスモールハウスの第1弾。

高さ2.4m、幅4mの大開口が印象的な「INSPIRATION（インスピレーション）」。トレーラーや船で移動することができる。床面積13.4㎡。価格は300万円〜。建築確認申請の取得も可能。ユニットハウスなどを製造・販売する「キューブスタイル」との共同開発。http://yadokari.net/

スモールハウスという言葉をご存じだろうか？　車1台ほどを駐車するスペース（約12㎡）に建てられる、文字どおり〝小さな家〟のこと。北欧やアメリカなどではすでに知られた存在で、そこでのシンプルな暮らしを含めて高い注目を集めているという。そんなスモールハウスを企画・販売すると同時に、国内外の事例や情報を発信するのが「YADOKARI（ヤドカリ）」。同社が運営するメディアには、ウェブサイト「未来住まい方会議」を中心に、1日約10万人が訪れる。

活動の中心は共同代表である、さわだいっせいさんとウエスギセイタさん。きっかけは2011年に起きた東日本大震災だった。当時IT業界で忙しく働いていた2人は、未曾有の災害を目の当たりにすることで、それまでの物質的な豊かさを求める生き方に疑問を抱くように……。自分たちなりに「豊かさ」や「幸せ」について考えたとき、住宅にかかる費用が金銭的に大きな足かせになっていることに気づく。

「今の日本では、家を購入するにしろ借りるにしろ、高額なローンや賃貸料を支払い続けなければなりません。それ以外の選択肢はないのか？　そんなとき、出合ったのがスモールハウスでした。例えば5000万円の家に対して、500万円のスモールハウスなら購入費用は10分の1。スペースが小さいので、光熱費なども安くなる。そのぶんのお金で、夫婦で留学したり、地域活動に参加したりといった、よりクリエイティブな使い道の選択もできるようになりますよね」とウエスギさんは話す。

最初はフェイスブックを使い細々とした情報発信からスタートした。既存の仕事と並行しながら2人だけでの活動。その半年後には「未来住まい方会議」サイトと、支援者の交流の場である「YADOKARIサポーターズ」を立ち上げ、その活動を軌道に乗せていく。

「自分たちが住みたいと思う家を紹介することから始まっているので、こんなに早く、しかもたくさん共感してくださる方々が現れたことは意外でした。スモールハウスに住みたいと思う人は世の中では少数派かもしれませんが、これからも新しい提案をしていきたいと思っています」（さわださん）

「〝家在りき〟ではなく〝人在りき〟で家を選びたい」

ウエスギセイタさん
YADOKARI代表兼プランナー

ウェブ制作会社などのデザイナーを経て独立。YADOKARIではコンセプトワーク、トータルデザインを手がける。

ウェブ制作会社の役員を経て独立。YADOKARIでは企画戦略の立案、ディレクション、PRを担当。

「住宅を建てる過程を楽しむ。そんな実験もしています」

さわだいっせいさん
YADOKARI代表兼アートディレクター

二級建築士の資格を持つ内田恭代さんが、自ら設計した「六帖軒」。2014年、自宅の敷地内に新たに建てた。シックハウス症候群のため、化学薬品を使わない伝統工法を採用している。

八ヶ岳山麓で、賃貸のトレーラーハウスをDIYしながら暮らすフリーライターの増村江利子さん。2014年、東京から移住した。

YADOKARIの著書『アイム・ミニマリスト』で紹介された本山早穂さんの家。彼女が一人で手作りし、ほぼ自給自足の生活を送っている。

住まいを小さくすることで自分に必要なものを見極める。

近頃では、空き家や空き地の再利用支援、地域の活性化支援などにも活動の幅を広げているYADOKARI。その根底には「暮らしを再編集する」という考えがあると、ウエスギさんは言う。

「スモールハウスは、それを実現するためのツールの一つ。家を小さくし、持ち物を取捨することは、モノや人、お金との関係性を改めて見直すためのキッカケになります。その上で、自分にとって一番大切なことは何なのかを導きだし、暮らし（人生）を再編集するんです」

2015年に発売された、彼らが手がけたスモールハウスの第1弾「INSPIRATION」に関心を示したのも、人生の再編集を意識している50代以上のシニア層だった。

「600件以上あった問い合わせのうち半数がシニア層、とくにリタイア組でした。中には、今住んでいる築40年5LDKの母家を子どもとその家族に譲り、自分たちは庭にスモールハウスを建てて終の棲家にしたいという人も」（ウエスギさん）

「INSPIRATION」は現在4棟ほどが建設されているが、ネックとなっているのはその狭さ。約13㎡（約8畳）の床面積に水回りを備えたワンルームのため、住居利用するには狭すぎるという声も少なくない。そこで開発されたのが、第2弾の「スケルトンハット」だ。活動的なシニア層向けに作ったというモデルは、2階建てで床面積約25㎡。最小限の居住機能を備え、必要に応じて内装を変更できる。また、床面積約5㎡の手軽なSサイズも用意する。

「家具感覚で購入できるよう、Sサイズは部材や部品がすべて梱包されたキットにしました。大人2〜3人いれば、組み立てられる手軽さが魅力です。Lサイズは、住む人が自由にDIYできる躯体（くたい）だけのタイプからすべての設備を施工したタイプまで、予算や希望に合わせて選ぶことも」（さわださん）

ちなみに価格は、躯体だけのLサイズなら820万円〜、Sサイズなら190万円になっている。

〝家〟にとらわれない自由な住まい方の選択肢。

YADOKARIとしての活動を開始してからは、共同代表である2人の暮らしも大きく変化した。独身だった彼らは結婚して子どもをもうけ、現在、さわださんは逗子の庭付き平屋、ウエスギさんは川崎の単身者向けマンションにそれぞれ家族3人で暮らしている。

「いずれスモールハウスに住みたいと思っているので、予行演習のようなものです。以前の部屋が58㎡で、今が28㎡ですから約2分の1ですね。大きく変わったのは、住宅コスト。家賃は半分、電気代は6割に減りました。狭くて部屋が少ないぶん、家族関係が密になって、会話は増えましたが、けんかも3倍（笑）。でも、家に居心地のいい場所を作れていると思います」（ウエスギさん）

インターネットの普及により、時間や場所にとらわれない働き方ができるようになってきた昨今、彼らに限らず、自由度の高い暮らしを実践する人は増えている。毎日職場に行く必要がないから、少し遠くても環境のよい郊外に住んだり、都市と郊外の2つを拠点にしたり。

「スモールハウスやゲストハウス、空き家など、さまざまな施設を使った、多拠点居住のネットワークは確実にできています。僕らも1〜2年以内には、スモールハウスでの暮らしを始めようと思っているんですよ」と、さわださん。「ゆくゆくは、スモールハウスがいくつも集まったヴィレッジ（村）を作りたい。もちろん、僕らも移り住んで情報を発信していきます。過疎化や空き家・空き地問題に悩む行政と連携することも視野に入れています」とも。

小さいながらも、創造性にあふれる豊かな暮らし。これからの人生を考えるとき、それは一つの有力な選択肢になるに違いない。

『アイム・ミニマリスト』（三栄書房）。小さな家で暮らす5組をYADOKARIが取材・紹介する。1,500円